



TITLE:

Histopathological Studies of the Spinal Cord(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Fujiwara, Tetsuji

CITATION:

Fujiwara, Tetsuji. Histopathological Studies of the Spinal Cord. 京都大学, 1963, 医学博士

ISSUE DATE:

1963-09-17

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211129>

RIGHT:

氏 名	藤 原 哲 司 ふじ 　　　　わら 　　　　てつ 　　　　じ
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	医 博 第 124 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 9 月 17 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	医 学 研 究 科 内 科 系 専 攻
学位論文題目	Histopathological Studies of the Spinal Cord (脊髓の病理組織学的研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 前 川 孫 二 郎 　 教 授 三 宅 　 儀 　 教 授 協 坂 行 一

論 文 内 容 の 要 旨

I) 各種疾患における脊髓蜘蛛網膜および根神経の病理組織学的研究

中枢神経系における軟脳膜についての Key and Retzius (1876) の古典的研究以来、この分野には解剖学的ならびに病理組織学的に多数の研究が発表されている。前川教授は以前から、脊髓蜘蛛網膜の病変と精神身体疾患との間に密接な関係のあることを指摘し、共同研究者によりこの方面に数多くの研究がなされている。

著者は京大病院前川内科入院患者のうち、治療観察中死亡せる神経系統疾患を除く各種疾患の中で40例の脊髓剖検例につき、硬膜、軟脳膜、根神経および脊髓神経節を破損することなく脊髓実質とともに実質的な連続切片を作製し、各種染色法を用いて精査し、各種疾患とこれら病理変化との関係を明らかにせんとした。

- 1) 脊髓蜘蛛網膜および根神経の病変は、その組織学的構造により次のごとく分類される。すなわち脊髓を囲繞する蜘蛛網膜増殖は、主として外層細胞層の増殖、主として内層細胞層の増殖とに分類され、後者はさらに線維性および硝子様増殖に分けられる。根神経部の根周囲増殖は、肉芽性増殖（蜘蛛網膜外層細胞由来）、線維性および硝子様変化（同じく内層細胞由来）とに分けられる。
- 2) 脊髓周囲蜘蛛網膜外層細胞増殖は、特定疾患に好発することはないが、若年者に少なく経年とともに増加する傾向にある。
- 3) 脊髓周囲蜘蛛網膜線維性肥厚（内層由来）は、神経循環衰弱症を含めた心疾患、消化性潰瘍に最も多く見られる。髄周囲硝子様変化は脊髓前面に限局して見られるが、一定の疾患との特別な関係はない。
- 4) 根神経部における蜘蛛網膜外層由来の肉芽性増殖は消化性潰瘍群に最も典型的に見られ、気管支喘息、神経循環衰弱症および類似疾患、ワ氏反応陽性例等がこれに次ぎ、高血圧症例では約半数に見られ、腫瘍群では見られない。線維性および硝子様増殖は心疾患に著しく、他の疾患には明瞭ではない。
- 5) 根周囲の肉芽性増殖の病因について考察し、リンパ吸収装置との関係について論じ、さらに臨床症状

との対応から、該病変がウイルスに起因する可能性について述べた。

II) 本態性高血圧症における脊髄側角細胞および蜘蛛網膜の病理組織学的研究

本態性高血圧症の病因に対する脊髄腎臓血管中枢の自律神経関与という立場から、本症の四例（心臓死二例，脳卒中死二例）につき臨床経過を述べ，その脊髄ならびに中枢神経系を病理的組織学的に詳しく検索した。

これら四例に共通した一般病理所見は，著明な動脈硬化症，細動脈硬化性腎硬化症，および心肥大である。また共通した脊髄病変は側角細胞（Superior intermediolateral cell column）の変性と，それに対応する部位の脊髄根神経の内芽性増殖であって，これら脊髄は前述のごとく，脳膜，根神経，脊髄神経節を破損することなく脊髄とともに取出して検索し，各神経細胞群については，変化の種類と程度とを詳細に記述分析した。

心臓死を来たせる最初の二例は，脊髄下胸部から上腰部にかけて（脊髄腎臓血管中枢に相当）側角細胞の強い変性と，ほぼ同じ脊髄位の根神経部の肉芽性増殖とを呈した。脳卒中死の後者二例は，脊髄側角細胞全域にわたって平均して同程度（30%）の強い細胞変性を呈し，根神経部に多少の変性を呈した。悪性腫瘍，血液疾患，心疾患などでは，かかる著しい変化を呈さず，精々10%までであり，対照例（先天性心疾患）では僅か3%の変性を呈したことなどから，これら症例の細胞変性ないしは蜘蛛網膜変化は，本態性高血圧症の発現ないしは維持に自律神経因子の関与の可能性の重要性を示しているものと思われる。

論文審査の結果の要旨

I) 各種疾患における脊髄クモ膜および根神経の病理組織学的研究。

神経系疾患を除く各種疾患で死亡せる40例の脊髄剖検例につき，脊髄クモ膜および根神経部病変と各種疾患との関係を検討した。まず脊髄クモ膜および根神経部に現われる病変の型をその構成細胞成分より分類し，なかんづくクモ膜外層細胞由来の脊髄周囲線維性肥厚は，神経循環衰弱症を含む心疾患，消化性潰瘍に最も多く見られ，根神経部では同じく外層細胞由来の肉芽性増殖が消化性潰瘍群に最も典型的に見られ，ついで気管支喘息，神経循環衰弱症および類似疾患，ワ氏反応陽性例等がこれにつき，高血圧症にも見られた。最後にこれらの病因につき検討を加へ，該病変がウイルスに起因する可能性について述べた。

II) 本態性高血圧症における脊髄側角細胞およびクモ膜の病理形態学的研究。

本症の病因に対する脊髄腎臓血管中枢の自律神経関与と言う立場から，本症の四例の脊髄を検索した。脊髄の各神経細胞群については変化の状態を詳細に比較検討したが，これら本症四例に共通した脊髄病変は，側角細胞変性とそれに対応する部位の根神経部の肉芽性増殖であり，これら病変が本症の発現ないしは維持に重要な関係のあることを述べた。

このように本研究は学術的に有益であり，医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。